カシミール刺繍 再生への道

被災地で職人育成 ■日本のNPO協力

縫い取りの練習をする女性たち＝ムザファラバードで、北川写す

昨年10月のパキスタン大地震で打撃を受けた伝統産業、カシミール刺繍を復興させる取り組みが被災地で始まった。日本のNPOが協力し、被災した女性を新たな職人として育成する。州政府も販路拡大などを通じて女性の仕事を後押しする方針だ。

6月中旬、NPO「JADE―緊急開発支援機構」の職業訓練センターがムザファラバードに開校。地元の職人夫婦が、16～48歳の女性40人に1カ月かけて技を伝える。

ほとんどの女性は地震で自宅を失った。テント村での生活を余儀なくされているが、講師のジャハンギールさん(30)は「みんなすごくやる気だ。もう少し訓練を積めば、商品として通用する」と太鼓判を押す。希望者も多く、近く生徒は80人に増える予定だ。

色鮮やかでくっきりとした模様が特徴のカシミール刺繍。イランから伝来し、600年ほどの歴史があるといわれる。

JADEの調査によると、地震前は300人以上の女性職人が作っていた。自宅でクッションカバーなどに縫い取りを施し、ムザファラバードの店に納入。月2千～3千ルピー(約4千～6千円)の収入が得られ、農業の乏しい山間部の女性には貴重な収入源だった。

しかし、パキスタンだけで約7万3千人が死亡した大地震でムザファラバードのほとんどの建物が崩れた。9割以上の女性職人が被災の影響を受け、生産は止まった。

観光客の人気が高く、地元の期待も大きい。アザド・カシミール州中小企業産業公社は、高い技術を身につけた女性に事業資金を低利融資することを決めたほか、イスラマバードなど都市部での販路拡大も急いでいる。

公社のタリク・パシール社長は「2～3年で地震前の生産水準に戻したい。将来は輸出にも力を入れたい」と語る。

(ムザファラバード〈パキスタン側カシミール〉＝北川学)

平成18年7月19日付 朝日新聞朝刊